

障害者対策総合研究開発事業 事後評価(令和6年度終了課題)について

「障害者対策総合研究開発事業」における令和6年度終了課題の事後評価結果を公表します。
詳細につきましては、以下の各項目をご覧ください。

1 課題評価の趣旨

■事後評価

研究開発課題等について、研究開発の実施状況、研究開発成果等を明らかにし、今後の研究開発成果等の展開及び事業等の運営の改善に資することを目的として実施します。

2 課題評価委員会 開催日

- (1) 身体・知的等障害分野 : 令和7年8月7日
- (2) 感覚器障害分野 : 令和7年8月7日
- (3) 精神障害分野 : 令和7年8月5日

3 評価委員一覧 (◎委員長) (敬称略)

(1) 身体・知的等障害分野

氏名	所属 役職
今橋 久美子	国立障害者リハビリテーションセンター研究所 室長
大串 幹	兵庫県立リハビリテーション中央病院 院長
河野 豊	茨城県立医療大学 医科学センター 教授
佐藤 伊織	国立大学法人東京科学大学 保健衛生学研究科 教授
◎ 神宮司 誠也	特定医療法人起生会 大原病院 副院長
田中 栄	国立大学法人東京大学 大学院医学系研究科 教授
平澤 恵理	学校法人順天堂 順天堂大学大学院医学研究科 教授

(2) 感覚器障害分野

氏名	所属 役職
小林 一女	学校法人昭和大学 大学院保健医療学研究科 特任教授
佐藤 伊織	国立大学法人東京科学大学 保健衛生学研究科 教授
永井 春彦	北海道勤労者医療協会 勤医協札幌病院 眼科副科長

平澤 恵理	学校法人順天堂 順天堂大学大学院医学研究科 教授
福島 邦博	医療法人さくら会 早島クリニック 理事長
◎ 村上 晶	学校法人順天堂 順天堂大学大学院医学研究科 特任教授

(3)精神障害分野

氏名	所属 役職
石井 良平	公立大学法人大阪 大阪公立大学 大学院リハビリテーション学研究科 教授
尾島 俊之	国立大学法人浜松医科大学 医学部 教授
◎ 加藤 忠史	学校法人順天堂 順天堂大学 医学部 主任教授
中里 道子	学校法人国際医療福祉大学 医学部 教授
中林 哲夫	独立行政法人医薬品医療機器総合機構 健康被害救済部 次長
西 大輔	国立大学法人東京大学 大学院医学系研究科 教授
西田 淳志	公益財団法人東京都医学総合研究所 社会健康医学研究センター センター長
長谷川 花	一般社団法人静岡赤十字病院 精神神経科 部長

4 評価項目

- ①研究開発達成状況
- ②研究開発成果
- ③実施体制
- ④今後の見通し
- ⑤事業で定める項目及び総合的に勘案すべき項目
- ⑥総合評価

※ AMED が定める 10 段階評価により、①～⑤を勘案しつつこれらと別に評点を付し、総合評価をする。

5 評価対象課題

(1) 身体・知的等障害分野:1課題

研究開発課題名	災害時における身体障害者の生活・健康維持に必要な代替支援手段の選定を効率化するデータ駆動型アセスメントシステムの開発
代表機関・役職	国立障害者リハビリテーションセンター・部長
研究開発代表者	硯川 潤
評価コメント	本研究は、身体障害者の災害時支援において、データ駆動型の支援体制を構築しようとする取り組みであり、構築したデータベースやアセスメントシステム、給付情報を活用し、地域訓練を実施するなど、実務面・学術面いずれの観点からも高く評価できます。今後は、本研究の成果が広く社会に活用されるように成果を周知・発信していくことが期待されます。

(2) 感覚器障害分野:3課題

研究開発課題名	聴覚障害者の災害時・緊急時における緊急通知音振動変換装置および情報共有システムの有用性の検討
代表機関・役職	国立大学法人岡山大学・准教授
研究開発代表者	片岡 祐子
評価コメント	本研究は、聴覚障害者の困りごと「緊急通知音が聞こえない」「自身の緊急情報を伝えられない」に対して、緊急通知音振動変換装置「D-HELO」の開発・改良・導入試験を行い、Apple Watchの無料アプリとして公開するなど、研究開発の完成度が高く評価できます。また、アプリ開発および検証が行われた上で、実運用を見据えてNet119の普及を図るなど、現場の実情や制度との整合性を踏まえた柔軟な展開が図られています。こうした政策連携・社会実装を意識した対応は、現実的かつ実効性の高いアプローチとして評価できます。

研究開発課題名	慢性めまいの層別化治療と治療装置開発に関する研究
代表機関・役職	公立大学法人奈良県立医科大学・教授
研究開発代表者	北原 紘
評価コメント	重力感受性障害を持つ難治性めまい患者に対して重力感覚適正化装置(Gravity Perception Adjustment Device: GPAD)の開発により重力感受性障害を是正する新規性のある研究です。今後は、医療機器の臨床場面での効果検証並びに研究の継続性に関する方策が期待されます。

研究開発課題名	災害時における感覚器障害者の援助要請手段と効果的な支援提供を実現する双方向連携システムの開発と社会実装に向けた効果検証
代表機関・役職	北海道公立大学法人札幌医科大学・教授
研究開発代表者	高野 賢一
評価コメント	本研究は聴覚障害者の災害時における情報取得と支援要請の困難さに向き合った取り組みです。開発にあたってはユーザー目線を重視し、各種防災訓練等でのシステム検証を丁寧に実施し、実装に向けた具体的な工夫が随所に見られます。今後は、公的機関の防災システムなどに組み込まれていくことが期待されます。

(3) 精神障害分野:8課題

研究開発課題名	多様なソースから収集するデータの蓄積と利活用のための個人情報の非特定化手法の開発とデータ加工技術の確立並びにデータの質担保に関する研究開発
代表機関・役職	国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター・室長
研究開発代表者	大庭 真梨
評価コメント	概ね、当初の計画通り研究が実施されています。一方で、非特定化の担保方法や手法の新規性、ELSI への対応、実装への行程に関しては、さらなる検討が望まれます。

研究開発課題名	精神科トランスレーショナルリサーチの推進に向けた精神医学研究システムの開発
代表機関・役職	国立大学法人東海国立大学機構・特任教授
研究開発代表者	尾崎 紀夫
評価コメント	トランスレーショナルリサーチの動向調査、当事者・家族より収集したテキストデータの自然言語処理について、概ね計画通りに実施されています。その上で、ゲノム研究を精神科診療に活かす提言などが発信されています。今後は、当事者や家族の意見を自然言語処理で解析した結果に基づき、より具体的な提案や考察が期待されます。

研究開発課題名	周産期うつ病予防のためのインターネット認知行動療法の効果最大化を目指した研究プロトコルの開発
代表機関・役職	国立大学法人京都大学・特定助教
研究開発代表者	豊本 莉恵
評価コメント	研究プロトコルが開発され、倫理審査の提出、プロトコル論文の投稿が完了しています。PPI に積極的に取り組み、各種ニーズのくみ上げができていく点も評価できます。

研究開発課題名	精神科領域のガイドラインの社会実装化に関する検証研究
代表機関・役職	国立研究開発法人国立精神・神経医療研究センター・部長
研究開発代表者	橋本 亮太
評価コメント	多くの医療機関や精神科医が参画した貴重な試みであり、その社会的意義は大きいと考えられます。一方で、観察された研修の効果に関しては、セレクションバイアスなどの可能性を排除するために、より慎重な検証が求められます。さらに今後は、patient-important outcome を当事者との共同創造によって設定するなど、研究・研修の方向性のさらなる検討も期待されます。

研究開発課題名	自殺ポリジェニックリスクスコアを用いた精神疾患患者の自殺リスク予測に関する研究開発
代表機関・役職	国立大学法人神戸大学・教授
研究開発代表者	菱本 明豊
評価コメント	当初計画した成果が得られています。自殺は、症状や問診だけで予測することは困難であり、自殺ポリジェニックスコアは、有益な情報が得られる可能性があります。一方で、当事者・家族調査からも、あくまで有効な治療法と予防法があれば意味がある、との指摘がなされている通り、(統合失調症の)自殺の有効な予防法が確立していない現段階において、どのようにこうした研究の応用活路を見出すか、スティグマのリスクを含めより深い倫理的な検討が期待されます。

研究開発課題名	アルコール依存とゲーム行動症の早期発見、発症予防、実効的治療評価指標の開発:視聴覚刺激を用いた縦断的研究
代表機関・役職	国立大学法人東京科学大学・講師
研究開発代表者	藤野 純也
評価コメント	研究プロトコルが開発され、倫理審査の提出も完了しています。研究プロトコルは海馬の活動性と依存症の関係など新規性を有しています。今後は、研究成果の社会や臨床現場での活用方法に関するより具体的な検討が望まれます。

研究開発課題名	「反復経頭蓋磁気刺激療法で改善が得られた治療抵抗性うつ病に対する再発予防のためのスマートフォン認知行動療法:ランダム化比較試験」の研究プロトコル開発
代表機関・役職	学校法人藤田学園藤田医科大学・講師
研究開発代表者	松田 勇紀
評価コメント	オープン・パイロット研究を行い、実現性の高いプロトコルの構築・開発がなされています。今後は、臨床試験の位置付けと目的を具体化することが必要と考えられます。探索的試験を想定しているのであれば、検証的試験を計画するために収集する情報の具体化が求められます。

研究開発課題名	誰でも名精神科医に:客観定量的行動解析の活用による双極性障害診断精度の改良とそれによる治療支援法の開発
代表機関・役職	国立大学法人浜松医科大学・教授
研究開発代表者	山末 英典
評価コメント	面談時の表情・発話特徴・視線などの情報を企業と協働してAI解析することで、単極性うつ病と双極性うつ病の鑑別精度を高めた成果は、双極性障害の診断補助に使用できる可能性があり、高く評価できます。今後は、企業と共同で着手しているアプリケーション開発のさらなる推進が期待されます。

(以上)